

# 地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

## CONTENTS

■堀理事長に聞く	1
■今年度私たちはこんなことに力を注ぎます	2,3
■支援地から ラオス・ネパール・カンボジア	4,5
■あらためて「開発」を考える	6
■地球の木と私	6
■今年度から理事になりました	6
■グローバルeye「中東の国レバノンで見てきたこと」	7
■気仙沼だより	7
■活動日誌	7
■インフォメーション	8
■編集後記	8

## 「分かりやすい言葉で情報を発信し続けたい」

### 就任2年目を迎えた堀千鶴理事長に、 今年度の抱負を聞きました。

\*昨年を振り返っていかがでしたか。

就任当時、地球の木のプログラムは進みつつも、新しいメンバーを迎えての理事会のスタート年でした。加えてパンフレットの改訂もあり、とても大変な一年でしたが、地球の木を根本から見直すことができたよい機会でもありました。

\*地元でも市民活動のリーダーとして活躍されていますが、そこで培ったまちづくりのノウハウを地球の木の運営に活かせますか。

海外支援を通して見てきたことをどのように会員の皆さんに伝え、還元していくか。そして共感してくれる人をどれだけ増やせるかということはとても重要です。

これはまちづくりでも同じ。地元の介護予防施設「デイ・スペースひまわり」のメンバーとともにネパールスタディツアーオンに参加して見てきたことを地域に活かすということ。一例ですが、季節のものを意識して食べる、乾物として保存する等生活の知識を次に伝えることの大切さを考え直しました。カンボジア、ラオス、ネパールの各支援地は国情も異なり、支援の内容も様々ですが、それぞれ学んできたことをシェアして国内活動に活かすためのノウハウを皆で学んでいく機会を多く作っていきたい。支援地というのは、気づきのきっかけを与えてくれるところだと考えています。

\*今年は何を大切にしていきますか。

できるところで少しづつでも「楽しいみたいよ」と言って関わってくれる人が一人でも増えればと思います。それぞれの



チームの構成はチームを担っていく中心メンバーと、応援はしたいけどあまり参加はできないという少し活動量の差のある人たちで二重、三重構造のチーム作りという柔軟な考え方もいいのではないかと考えています。またチームの評価を自分たちでするのではなく、今年はお互いに評価し合うという方向で取り組みたいと思っています。各チームの3ヵ年計画は、3ヵ年を3回やって、やっと見えてくることもあります。当初の目標が達成され、区切りがつけば、ネパールの前プロジェクトのパートナーNGO・SOARSのように友人としてやっていくこともあります。今年はそういうことも考えてていきたいと思っています。

\*それで活動推進チームが新しくできたのですね。

活動推進チームのメンバーは理事4名。各チーム、色々な事業のプログラムが目標に沿って動いているか、チームで力が足りないところには力を注ぎ進めてもらうという、文字通り各チームの活動を推進していくチームです。従来の縦割りではなく、横方向にも連携を強化する。また一つのイベントがそれっきりで終わらず次につながるように、地球の木全体のイベントとして取り組めばと思います。4月のカンボジア講演会はその一例で、皆が一丸となって取り組んだ結果、たくさんの参加者を迎えるました。そしてカンボジアチームができました。こういうことが励みになり次につながっていけばと思っています。

\*今後の地球の木は？

地球の木創立当時はNGOの数は少なかったのですが、今や数多くある他のNGOとの違いを明らかにしなければならないと考えます。地球の木の支援地の様子を、いかに分かりやすく伝えていくのか、理解し、共感してもらいやすいように情報を発信し続けることができるかが課題だと思います。

(会報作成チーム)

# ～今年度私たちはこんなことに力を注ぎます

## 「ネパール教育サポート募金」にご協力を!

少数民族が多く暮らす、地球の木の支援地では、高校に行きなくても行けない子どもたちが大勢います。地球の木はこれまで11年にわたり、こうした高校生たちに奨学金支援を行ってきました。えっ？ 高校生？ なぜ小学生ではないの？ と疑問に思われる方もいらっしゃると思います。

ネパールの学校制度(現在は2016年の教育基本法改正による新制度へ移行中)では、10年生を修了した時点でSLC(中等教育修了資格)試験を受け、合格すればその後二年間の高校を経て専門課程のある大学進学への道が開かれます。しかし無償の小中学校とは異なり授業料がかかるため、懸命に勉強してSLCに合格しても、貧困により進学をあきらめざるを得ない子どもたちがいます。特に女の子は、家庭のために親の決めた人と結婚させられてしまうことが多いのです。

地球の木が支援してきた元奨学生たちは、現在は地元の小学校の先生になったり、自力でアルバイトをしながら大学を卒業して歯科助手となったり、大学で研究を続けていたりと、生き生きと自分の選んだ道を進めています。

また、村では小学校の先生が不足しています。民族の言葉を話す、地元出身の先生の存在は子どもたちの学習の励みになっています。地球の木では、このような地元の先生の給与支援や、子どもの主体性を尊重する教師トレーニングの機会を提供しています。

今後も地球の木の教育支援事業が継続できるように、ぜひ、奨学生と小学校の先生のサポーターとなって、一口1,000円(何口でも！目標450口)の募金をお願い致します。サポーターになってくださった方には現地レポートをお届けいたします。

(ネパール担当理事 磐野 昌子)



奨学生から村の先生になったアンジャナさん（中央）

## もっとラオスを知ってほしい

ラオスチームメンバーは、ラオス大好きと自認する中野真理子さん、久保田由紀子さん、木谷博子さん、松本陽子さんです。

地球の木のラオス支援は、JVCの支援プログラムを応援すると

いう形をとっています。直接的にラオスの活動や人々と関わることではありません。JVCとしてもラオスの国家体制への配慮や許認可手続きの複雑さなど難しい課題を抱えつつ、村人の視点を大切にし、その置かれている状況を調査し、最善のプログラムを実施していくという時間や労力がかかる支援に取り組んでいます。

ラオスという国名は知っていてもどんな国？ 文化は？ 人々の暮らしは？ など、詳しくは知らないという人も多いのではないかでしょうか。ラオスチームは、多くの人たちに興味を持ってもらうために、現地で実際に支援を担当しているJVC職員の報告を聞いたり、現地調査に行ったメンバーたちの経験を基に講座を行っています。

「ラオスの森はスーパーマーケットである」つまりラオスの大多数人たちは、現在でも森が持つ資源をうまく利用して暮らしています。その持続可能な森との関わりを知ることで私たちの暮らしや自然との関わり方を見直すことにもつながっています。しかし近年、大規模開発による環境破壊や人権問題が大きくなっています。

ラオスチームとしては、「出前講座」や「地球の木カフェ」などの活動を通じて、ラオスへの理解を深めてもらいたいと考えています。

(ラオス担当理事 大嶋 朝香)



中学校でラオスのワークショップ

## カンボジアプログラム 展望

カンボジアのプログラムは、危機的状況にある女性たちのための活動を幅広く行っているNGO・CWCC (Cambodia Women's Crisis Center)の支援を行っています。昨年に引き続き、日常的な食費などCWCCの保護シェルターの運営費用の補助、入居者が地域に戻り新しい生活を開始するための支援、経済的自立のための小規模事業開始資金の支援、の3項目です。地球の木の支援の内容、実施状況の確認のため、事務所、シェルター訪問のみならず、懸案事項であった起業した女性たちのインタビューも訪問時に設定できるようになりました。

今年度の活動方針の一つ、スタディツアーの実施のため、6月の訪問において各方面にスタディツアーの受け入れ要請を行い、年度内実施に向け準備を進めています。

また、これまでの活動を伝え、理解を深めるため、地球の木カ

皆さんにも、できる範囲で興味あることに参加していただけたら嬉しいです。皆さんの地球の木への更なる一歩をお待ちしています。

フェへの参加、合同報告会の企画も併せて進めています。

カンボジアにおけるプログラムは、チャイルドセンター支援、トレーニングセンター支援、クラフト事業支援など、さまざまに展開し長期間にわたり行われてきました。地球の木にはカンボジアの状況を長く見守っていらした方も多くいらっしゃいます。

カンボジアの政治経済など、社会的な状況の把握のための企画等とともに、カンボジアチームに多くの方の参加を呼びかけ、カンボジアにおけるプログラムの充実を図っていきたいと考えています。

(理事 植田 泉)



カンボジア、CWCCでのクッキングトレーニング

### 新しく発足した「活動推進チーム」

理事として関わり地球の木の活動の特徴を知りました。一つ目は、組織の在り方として各チームが主体になって自主的に活動をしていること。二つ目は、継続して支援をしているからこそできることがあること。三つ目は、海外支援で学んだことを日本で市民のマンパワーにつなげていること。30年近い活動の積み重ねが地球の木らしい活動の特徴です。しかし、課題もあります。一つ目は資金です。会員の高齢化に伴い亡くなる方や経済的理由で脱退が続いている。緊急的な海外の支援をしたいという理由で辞められる方もいます。二つ目は活動しているメンバーも高齢化していることです。

このままでは…という危惧を感じ、理事会に「活動推進チーム」の立ち上げを提案しました。主な目的を一言でいうと「知らせていく活動」です。先ずは“あばさんたちのマンパワーをつくろうでいいんじゃない?”ということになり地域の居場所などで海外支援の報告会を行い、意見交換では平和、ジェンダー、民主主義、政治の在り様などにつながる様々な意見が出て来るのではないかと期待をしています。

様々な場所で皆さんのが集う「地球の木カフェ」を開催し、今の地球の木が持っている力で会員や地域の方たちに発信していく!ということになりました。自分が拠出した会費が“生きたお金”として使われていることを知らせていきたいと思います。

近くでカフェを開催した時には是非参加して、一人ひとりの思いを語り合いましょう。

(理事 五十嵐 仁美)



地球の木カフェ。写真からネパールを知る

### 未来に思いを託す新寄付(遺贈)

未来に思いを託す新たな寄付の窓口設置における検討会が始まっています。

地球の木が理事、評議員として参加している「公財かながわ生き活き市民基金」は社会や地域の課題を解決したい団体と、それを応援する人々をつなぎ、市民が主体的に住みやすい豊かな社会を作る活動を生活クラブの組合員や市民からの寄付で応援していました。

現在、生き活き市民基金では、高齢化、少子化、未婚化などにより、市民が保有する資産を受け継ぐ人がいない人や、社会に何か貢献したい人の思いを実現する受け皿として、遺贈・生前寄付や香典返しによる寄付の仕組みの検討会を立ち上げています。

いくばくかのお金が遺贈や生前寄付という自分の遺志という形で、頑張る人たちへの贈り物になったり、次の世代に思いを託したり、実現したかった社会への貢献に役立ったりと、社会への恩返しを行動で示す仕組みです。

生活クラブ運動グループにはワーカーズ・コレクティブやNPOなど社会をよりよくしたい、住みやすい地域を作りたい、住みなれた地域で生活したいという人たちの思いを実現する様々な団体があります。地球の木もその一つです。

社会貢献したい思いを持った方々の善意を、きちんと活かし、活きた使い方にするためには、法律上の問題や税制上の問題など様々な解決すべき検討課題があります。

地球の木もこの検討会に参加し、市民活動と寄付者をつなぐ相談窓口の設置や仕組みについて先行団体を招いての学習会や、専門家の知見・受け入れ団体等が様々な問題を想定した検討を進めています。

(副理事長 成瀬 悅子)





MoU調印式

## from Laos

### ラオスで国際協力NGOが活動するのに必要なこと

いつも変わらぬご支援をいただき、誠にありがとうございます。今回はちょっと趣向を変えて、私たちNGOスタッフにとっては鬼門とも言える、ラオス政府からの活動許可などについて、紹介させていただきます。

JVCのような国際協力NGOがラオスの農村で活動するには、2つの申請が不可欠となっています。一つはオペレーション・パーミット(OP)。これは分かりやすく言えば団体登録。年に1回、設立の主旨だの過去の実績だのを細々と書いて政府に出し、登録を認めてもらうことが必要となります。ただしこれだけでは活動はできません。実際のプロジェクトを行うためには、この何倍もややこしい手続きが必要となります。

通称MoU(=Memorandum of Understanding)の申請がそれで、「覚え書」などと訳されることもありますが、要は政府からの許可で、郡一県一中央省庁の各段階の合意を得て調印式に至らない限り、原則的に活動はできません。

私たちのように継続的に活動を行ってきた団体の場合には、前のプロジェクトが終わる前に、次のプロジェクトでどんなことをやるかなどを小出しに説明して、まずは郡や県の担当者に探りを入れます。前のプロジェクトと違うことが認められない場合もあれば、新しいことをやってほしいと、先方が腹案をもっている場合もあります。

もちろんJVCにはJVCのNGO組織としての譲れないポリシーがありますから、ある程度までのすり合わせを行い、そのうえで申請書を提出します。政府の基準では、監督官庁への申請書の提出からおよそ3ヶ月で判断が下されることになっています。しかし実際には、前述のような事前の打診や根回しを少し、さらに部局ごとの異なる対応や、審査途中の政策の変更、担当者の“鶴の一声”などにも悩まされます。加えてヴィエン



ヤギの飼育がスタート！契約書を交わす

785世帯、人口3,737人、ポカリナラヤンスタン区は世帯数647、人口2,945人です。(2011年の国勢調査による)

今年4月、SAGUNがポカリナラヤンスタン区で状況調査を行いました。目的は地域の人たちや行政の人たちとの関係づくり、人口、教育、健康、子ども、生活、インフラなどの状況の把握、課題の特定などです。参加型の調査なので、全世帯へのアンケート調査に始まり、各地域で次のようなインタビューなどをています。テーマに沿ったグループに集まってもらい、自由な討論をして情報収集するフォーカス・グループ・ディスカッション。各地域のキーパーソンへのインタビューなど。現地視察を経てデータを分析し、報告書を作成します。11人の調査員が3日間のトレーニングを受け、現地で9日間調査に当りました。調査では、いくつかの課題が明らかになりました。飲料水の不足が女性たちの生活を圧迫していること。急峻な崖が多く、学校が散在していること。保健施設がとても遠いこと。貧しく、外国に出稼ぎに行っている人が多いことなどです。

ポカリナラヤンスタンでもヤギの飼育プログラムがスタートしました。昨年11月に訪問した際、マンガルタールでのヤギの飼育の成功を聞き、「私たちもできる！」と声を合わせた人たちです。トレーニングが行われ、4月にはヤギを購入する貸付資金が手渡されました。2015年に新憲法が制定されてから、地域の人たちの自主性が重んじられるようになりました。この地域にも新しい希望が生まれることを願っています。

(ネパールチーム 丸谷 士都子)

## from Nepal

### ポカリナラヤンスタンにて状況調査

ネパールの「幸せ分かち合いムーブメント」により、ロシ町マンガルタール区(名称が変更)で参加型村づくりのモデルを作ることができ、この事例を隣のテマール町ポカリナラヤンスタン区にも移行しようとしているところです。

「状況調査(ベースライン調査)」とは、村で活動を始めることが決まった後、最初に行う調査です。10年前マンガルタールで始めた時も地域の青少年たちと一緒にいました。村の人たちとの関係づくりはもちろん、どこに活動の重点をおくかを検討したりする貴重なデータとなると共に、活動の効果を後に計るために重要な調査です。マンガルタール区は

## from Cambodia

### カンボジア訪問から見えてくるもの

7月に行われたカンボジアの総選挙が日本でもニュースとして、取り上げられていました。ご覧になった方も多

いと思いますが、総選挙前に最大野党が政府から解散を命じられたため、事実上、野党不在の状態です。与党の政策を正当化し、フンセン首相の事実上の独裁体制を強めるための選挙と言われています。このため、米国、欧州連合は選挙支援を取りやめ、日本も監視員派遣は見送りました。

この結果、中国との関係がより深まついくと予想されていますが、ここ数年のプノンペンへの中国企業の進出には圧倒されるものがあります。

地球の木は現在プノンペンにおいてCWCCのシェルター支援を行うとともに、交易事業の生産地も同様にプノンペン周辺、タケオ州などに置いてきました。以前は韓国企業の進出が目立っていましたが、今年6月の訪問ではどちらを向いても中国企業の表示があり、簡体字が建築中のビルの壁面にも書かれています。確かに都市として大きく発展し、経済的に豊かな部分が多いことも感じますが、その一方で貧富の格差の拡大も実感させられた今回の訪問でした。

CWCCにおける地球の木の支援は、シェルターから地域に戻り新たに生活を立て直すための起業支援も含みます。その支援を受けた方が地域に戻り、どのような生活をしているか、実際に会ってインタビューを行うことも重要な訪問の目的です。今回は市場で野菜販売をするための支援を行った方の家に伺いました。

プノンペンの中心部からそう遠くない川に近い地域の、きれいに整備された大通りからほんの数百メーターのところでですが、水はけの悪い、小さなゴミ山に囲まれた広場で、野良犬がうろつき、丸裸の幼児が走り回り騒いでいました。家の前の空き地でインタビューを行いました。

サヴァイバーは16歳でレストランで働いています。近くの市場で仕事中のため会うことはできませんでしたが、野菜の販売は母親の仕事です。サヴァイバー本人のみではなく、家族全体の経済的な安定のための支援の形です。彼女の母親は読み書きができるそうですが、彼女は小学校3年ぐらいまでしか行っていないため、ほとんど読み書きができず、レストランでも補助的な仕事しかできないとのことでした。笑顔でインタビューに応じてくれましたが、過酷な状況が推察されます。若い世代がより低い学力しか持てない状況に経済発展の裏側を見る思いがしました。

(理事 植田 泉)



繁栄の裏で、ここもプノンペン

# あらためて「開発」を考える

今回、地球の木の元副理事長で、現在は横浜NGO連絡会(YNN)理事長の斎藤聖さんに寄稿していただきました。

国連が2030年までに達成すべき目標として掲げたSDGs。Sustainable Development「(環境破壊等を伴わない)持続可能な開発」に、あらゆる分野(いわゆるマルチセクター)の立場で取り組もうというものです。開発途上国に住む人も先進国に住む人も「誰一人取り残すことなく」という思想は、地球の木もこれまでやってきたことですから別段新しい概念ではありません。では、今なぜSDGsの取り組みについて考える必要があるのでしょう。

地球の木には、『マジカルバナナ』という開発教育教材があります。地球の木も支援に関わっていたフィリピン・ネグロス島の農村の人々と、グローバルなアグリビジネスに組み込まれて搾取される人々の生活をリアルに感じながら、私たちの消費行動が生産者の人たちの生活につながっていることを知り、「開発」問題を考えるきっかけになる教材です。「安さ」の裏には何かあるよね。消費する側も「エシカルな消費(※)」を考えなければ…。『マジ

カルバナナ』を使ったワークショップでは、こんな感想や意見がよく聞かれます。

そこで、フィリピンのバナナ生産者の人たちに会って彼らとつながりたいと考え、早速航空券を調べたら…。ある日のマニラ便、LCCのチケット価格は大手航空会社のなんと3分の1。新幹線で博多へ行くより安い。仕事で利用する場合は経費の削減は大事です。みなさんの寄付で成り立っているNGO・NPOはなあさらですが、この「安さ」の裏に何があるかは考えなくてもいいのでしょうか? 私たちは否応なくグローバルな経済の中に生き、その恩恵を受けて暮らしています。その中で「誰一人取り残さない」ためには…。SDGs、奥が深いです。一緒に考えていきませんか?

(※)「エシカルな消費」:人や地球環境、社会、地域などに配慮した製品やサービスを選んで消費すること。



## 今の私があるのは…

13年前の初夏、地球の木への通勤初日、スキンップしたくなるような気持ちで駅までの道を駆けた朝を思い出します。以来3年間、事務所のトイレ掃除から海外へのスタディツアーまで、会費納入のお願い電話から出前講座まで、幅広い業務を担当させていただきました。

今、国連の難民支援機関をサポートするNPOで働いていますが、採用されたのは地球の木での経験のおかげです。その後の実務でも、すごく役立っています。お金をかけず自力で考えて、なんとか仕事を前に進めるという姿勢が身についたので、ベンチャー起業のような現職で、色々な変化に対応してくることが出来ました。

それ以上に学んだのは、ボランティアリズムです。ボランティアというとプロフェッショナルと対比して、好きな時にお膳立てされた仕事をやる気楽なものと捉えられがちですが、本当の意味でのボランティアって、当事者意識と社会的責任に対する感度が高くないとできないです。

地球の木で出会った皆さんは、自主的に自分の役割を考えて、無報酬で活動に取り組んでいました。しかも軽やかに!自分が歳を重ねてこんなふうになれるとはとても思えず、皆さんのバイタリティと人間性に脱帽でした。世界の貧困問題も、慈善の対象ではなく自分たち側の問題だという地球の木の認識が、スーツと胸に落ちて来て信用できる団体だと思ったのをよく覚えています。

(相模原市南区 関川 深子)

今年度から理事に  
なりました



十数年前に乳井さんとお会いした時に地球の木の活動方針を熱く語られ、趣旨に賛同し入会しました。私としては活動が箱物や一過性ではなく、読み・書き・技術の習得のように子々孫々まで継続され地域に喜ばれる事業であって欲しいと思います。専門は衛生工学、特に上下水道部門なので、個人的には生活環境・公衆衛生の観点からの取組みにも目を向けていきたいと考えています。現在、技術顧問として勤務しておりますので仕事・家庭・健康との兼ね合いを考慮しながら地球の木の活動のお役に立てれば幸いです。よろしくお願ひいたします。

(理事 石北 正道)

## 中東の国 レバノンで見てきたこと

2011年3月、東日本大震災が起った時分、世界ではシリアに「アラブの春」が訪れ、その後に泥沼化していくシリア紛争の幕開けとなつた。今も震災からの復興に苦しむ人々が大勢いると同様に、シリアでは空爆に怯え、国外に流出した564万人もの難民が行き場のない暮らしを強いられている。

この2月に私がシリアの隣国、レバノンを訪れたのは、シリア難民キャンプの人たちが凍死しないように、灯油を購入するための緊急支援をして欲しいという友人からの訴えがきっかけだった。難民支援のためにレバノンに駐在していた友人のFacebookには、シリアからブローカーに連れて歩で山を越えて密入国しようとした人々が吹雪に遭い、サンダルにパジャマという着の身着のままで逃げてきた女性や子どもたちが凍死したというショッキングなニュースが写真と共に報告されていた。私の息子よりも幼い子どもたちの悲惨な姿に胸が締め付けられた。私には、Facebookのシェアと僅かな寄付を捧げる以外にできることはあるのだろうか。大反

対する家族をよそにレバノンの友人に会いに行つた。

レバノンには中東のパリと呼ばれるほどお洒落な街並みがあり、料理も美味しい、歴史的な遺産も数知れない。友人が観光に連れて行ってくれたところはどこも素晴らしい、ほんの50km先のシリアの首都ダマスカスでは空爆が行われているのかと思うと信じられなかった。シリア難民のキャンプでは4回目で最後となる灯油と食糧ボックスの配布に立ち会い、子どもたちのための教育施設を訪問させてもらった。老夫婦が私たちをテントに招き入れ、食糧ボックスから出したばかりの貴重な茶葉と砂糖を使ってお茶をご馳走してくれた。お湯を沸かす灯油も貴重なのに。教育施設では、キャンプで生まれ育ち、

初めての学校に緊張して暗い顔をしていたという子どもたちが、数ヵ月が経った今は喜びに目を輝かせながら学習に励んでいた。

帰国した今も私ができることは僅かな寄付でしかないのだが、出逢った人たちの顔、その存在を心にとめながら日々を暮らし続けようと思う。

(逗子市 磯野 昌子)



シリア難民のための教育施設で

### 気仙沼だより その22

津波で大きな被害を受けた場所はだいぶ復興が進みましたが、コミュニティの再生は難しいようです。地域の力を取り戻すために、多くの人の知恵や努力により、さまざまな活動が行われています。その一つとして地球の木も何かできないかと考え、6月24日、Tree Seedの事務所のカフェで「<sup>いち</sup>から作るチョコレートワークショップ」を開催しました。

参加者は約10人でほとんどが男性という構成でしたが、「へえー」がたくさん出ました。カカオ豆からチョコレートを作るという「にがくて甘い」体験とカカオの産地の話で、これがおいしく楽しい話題になり、人がつながる材料になればいいなと思っています。次には子ども向けのワークショップも計画しています。  
(副理事長 廣瀬 康代)



### 活動日誌(6月~8月抜粋)

#### 6月

- 4日 第1回理事会
- 7、8日 デポー展示会(東寺尾)
- 9日 出前講座(鎌倉女学院高校)
- 9日 デポー展示会(東戸塚)
- 14日 エッコロ講座(霧が丘)
- 22、23日 デポー展示会(ほんもく)
- 25、26日 デポー展示会(緑園)
- 30日 出前講座(町田市立真光寺中学校)

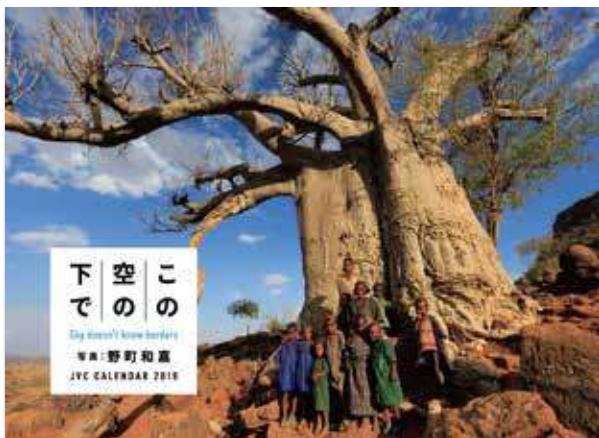
#### 7月

- 2日 第2回理事会
- 4日 出前講座(立川市立第9中学校)
- 5、6日 デポー展示会(平塚)
- 13、14日 デポー展示会(鎌倉)
- 26日 地球の木カフェ(東戸塚)
- 30日 エッコロ講座(相模大野)

#### 8月

- 1日 地球の木カフェ(弥生台)
- 6日 第3回理事会
- 21日 エッコロ講座(東戸塚)
- 22、23日 デポー展示会(らいふたうん)
- 27、28日 デポー展示会(せや)

## 2019年版 「地球の木」カレンダーができました！



・カレンダータイトル:「この空の下で」

・写真家:野町和嘉氏



・サイズ

壁掛け:32cm×38.5cm

(使用時 60cmx38.5cm)

卓 上:15.5cm×17.8cm×7.5cm

・制作元:

日本国際ボランティアセンター  
(JVC)

・価格

壁掛け: 1,600円(税込)

卓 上: 1,300円(税込)

### ひらつか市民活動センターまつり

2018年9月23日(日)10:00~15:30

場所:ひらつか市民活動センター

活動紹介、クラフト販売で参加



### パタゴニア関内店出展

2018年9月29日(土)11:00~17:00

場所:パタゴニア関内店

カンボジアのシルク製品を販売します。

### よこはま国際フェスタ2018

2018年10月6日(土)、7日(日)10:30~16:00

場所:グランモール公園(みなとみらい)

活動紹介、クラフト販売で参加

### スタディツアー

#### ネパールスタディツアー2019

～支援地を訪ねるふれあいの旅～

地震から復興しようとする少数民族の村でホームステイし、人々の暮らしや生きる知恵から学びます。

日程:2019年3月16日(土)から3月24日(日)10日間(機中泊2日)

主催:風の旅行社 現地プログラム企画:地球の木



9月17日(月) 緑園	10月22日(月) 霧が丘
18日(火) ノ	23日(火) ノ
9月20日(木) ちがさき	11月30日(金) ほんもく
21日(金) ノ	12月1日(土) ノ
9月25日(火) 鎌倉	12月3日(月) つなしま
26日(水) ノ	4日(火) ノ
10月8日(月) 市ヶ尾	12月7日(金) 東寺尾
9日(火) ノ	8日(土) ノ
10月20日(土) 東戸塚	



特定非営利活動法人

# 地球の木



会報誌の原稿は依頼することが多いのですが、編集部員が書かなければならぬことがあります。書く立場、編集する立場、両者それぞれの難しさを痛感します。依頼原稿も身内(?)の原稿も、読み手によりよく分かってもらうと同時に筆者の意図を正確に伝えることが編集のすべてだと考えて、編集会議では時に激しく意見が飛び交っています。(M.H)

#### 訂正とお詫び

前号(75号)1ページの「今知っておきたいカンボジアの話」の中で、「20年以上悪政を続けたクメール・ルージュの…」とありますが、これは「4年以上…」の誤りでした。訂正とともに、ご迷惑をお掛けした講師の米倉様、そして読者各位にお詫び申し上げます。(会報作成チーム)